



スカウト 浄土

長野オリンピック特集

金メダル日の丸高々と

BS 飯田 里谷選手の表彰式に

長野五輪の各競技では日本選手が活躍して上位入賞の好成績を収めているが、長野市内のセントラルスクエアを会場に開かれる表彰式で、各国の国旗掲揚、降納を担当する日本ボーイスカウト長野県連盟飯田第一団「ベンチャースカウト隊」(安静達祐)の隊員は十一日、フリースタイルスキー女子モーグルで優勝した里谷多英選手の表彰式で日の丸を掲げ、日本の「金」をともに喜んだ。



金メダル里谷選手のために日の丸を掲揚するスカウト隊

里谷選手は、コブ斜面をとらえた的確な滑りと「コザック」などの大技をきっちりこなして、二位以下を大きく引き離す25・06ポイントをあげ、日本人女性としては冬季五輪史上、初めての金メダルを手中に収めた。

ベンチャースカウト隊の高校生七人は、八日のスノーボード競技を皮切りに毎晩、表彰式に臨んでいたが、日本勢が金メダルを獲得して日の丸を揚げたのは、この日が初めて。「君が代」が流れる中、日の丸は正旗手岩原大介、副旗手副沢恭の両隊員によって高々と揚げられた。

また、この日はスキージャンプのノーマルヒル(K点九十メートル)で船木和喜選手が二回目に九十メートル五十を飛ぶなどして、ジャンプ個人種目では十八年ぶりとなる銀メダルに輝いた。この表彰では中田裕之、熊谷健太郎の両隊員が日の丸を掲揚した。

セントラルスクエアは相次ぐ日本勢の活躍に応援者が集まって超満員。歓声と熱気の渦に包まれながらの表彰式だったが、

各隊員とも相好を崩さず凛々しい姿で掲揚台のロープを握った。会場には子息の晴れ姿をひと目、見ようとすする隊員の家族が駆けつけて、別の意味で声援を送った。

表彰に臨んだ飯田市主税町の飯田工業高校二年熊谷健太郎隊員(二七)は「これまでロシアやイタリアの国旗掲揚を担当したが、日の丸の掲揚では『他の国とは違う』という意識が生まれ、すごく感動した」と話していた。

安静団長は「金、銀という日本選手の表彰に立ち合えたことは大変に有意義。正旗手は注目されがちだが、国旗の姿を美しく見せるための副旗手の仕事も大変重要になる。緊迫感の漂う会場で各隊員とも立派に任務を遂行してくれた」と労いの言葉を語っていた。ベンチャースカウト隊は次のみなさん。

▽岩原大介、福沢恭、神藤啓介、中田裕之、熊谷健太郎、常盤誠、小沢健夫。

地球にやむこころ…人にやむこころ

ガールスカウト日本連盟

長野県第三十六回レンジャーリーダー 村 沢 敏 枝

私の所属している長野県第三十六回は、長野県の最南端に位置し、柏心寺に事務局を置いてスカウト四〇名、リーダー、委員二〇名で活動しています。

発足八年目を迎え、花祭り、清掃奉仕、地蔵盆、舎営、キャンプ、成

道会、ユニセフ募金、鉛筆供養などの他各部門ごとの集会は、和気あいあいの中で心を大きく成長させてくれます。

今年度は新たに、レンジャー部門が誕生しました。リーダーといっ

も全く経験のない事業であり、支部役員の方々に指導頂きながら研修を重ねて参りましたが、まさに自分自身の勉強でありました。

そんな中で、世界の一大イベントである、冬季オリンピックが長野県で開催されると言う幸運となり、選手団の入村式では、国旗などの掲揚に携わる活動のチャンスに恵まれることができました。オリンピックが開催される地域は、同じ長野県でも、北に位置していますので、初めは関心も薄かったのですが、レン

ジャーとしてまたとないこのチャンスを生かして、ひとつでも役にたつ事ができればと参加することになりました。南の端から北の会場への研修は距離もさることながら、交通手段に大変苦労しました。それでも早朝出発し、時間に間に合う様に頑張り一回も休む事なく参加しました。

昨年の秋から研修が始まり、参加する心構えから旗揚げについてのNAOCよりの講義、規律訓練、旗の扱いなどの他に国旗掲揚業務の研修会もボイススカウトと共に県庁で開かれ、世界的にも有名な、吹浦忠正氏より「国旗と国際理解」

についてのアドバイスと、セントラルスクエアでの実習を重ね、いよいよ本番に向けて選手村での研修に入り、指揮者の合図でポールに旗を掲揚する練習を何回も繰り返し本番を迎えました。回数を重ねていくうちに自信ができてきたようで、自然に体が動いている姿は、感動しました。南信地方の気候と違って、小雪がちらつき寒さが一段と厳しい中での本番は、身も心も引き締まり、緊張の連続でしたが、スカウトの一人は、「心配してカチカチになっていた時、外国の選手団が笑えん

で来たことで緊張がほぐれ、上手に掲揚する事が出来た」と話してくれました。又、もう一人のスカウトは、「南信地方から参加でき、いろんな選手と交流ができた事に感謝し、この経験をこれからの活動に生かしていきたい」と話してくれました。

入村式終了後は、直ちに入村式に掲揚した旗を常時掲揚旗（IOC旗一基、日章旗二基、エンブレム旗二基）に付け替え、取り替えた選手団の旗をロータリーのポールに付け替えるまでが、スカウトの一連の仕事でした。

本番を終え、厳しいなかにも貴重な体験ができ、知・徳・体のバランスのとれた、人間形成の上で、大切な教えを身につける事ができた事と思えます。

今後ますます、世界に目を向け、国際感覚を持ったスカウトに成長するよう、二十一世紀に向かって、私達も一緒に勉強をしてまいりたいと思います。



バージン諸島のプラカードを持つ塚田晃子さん

